梁の文學集團

――太子綱の集團を中心として――

森野繁夫

梁における文學集團の大部分は、中央政府あるいは諸王府に作られた政治色の濃厚なものであり、いわゆる同好の士の集りは僅かである。すなわち、裴子野を中核とする劉之遴、劉顯、張纘ら「古體派」の集り、蕭琛、蕭眕素、蕭介、蕭洽、蕭叔らの、宋における謝氏の「烏衣の遊び」にも比せられた蕭氏一門の集り以外は、高祖蕭衍、昭明太子蕭統、晉安王蕭繹、また安成王蕭秀、南平王蕭偉らの政府に作られた公的な集團であった。それは前代に比べて、個人の立身出世のための集團參加、立場をかえれば、集團主の政治的發言力を强化するための集團作り、という、文學偏重の時代にあっての功利的な要素の强まりの結果であろうと思われる。梁初天監の世に、高祖は齊以來の文學の士である沈約、江淹、任昉らに、後進文學の士の劉苞、劉孝綽、劉孺、到溉、到洽、到沆、陸倕、張率、丘遲、王僧孺らを加えて大規模な文學集團を作ったが、その際に、ただ屬文の才があるというだけで立身のきっかけを摑んだ者も多くあった。またそれ以後においても、高祖の宴坐で巧みな文章を作り、それを認められて卽座に官職を進められた例は枚擧にいとまがない。一方、集團主の側においても、集團强化のための積極的な人集めが常に行われている。

このような時代的環境の中にある文學集團においては、文學に關する主導權は程度の差こそあれ、政治的權力の保持者である集團主の手に握られており、そこで作られる詩文は集團主の好みに合わせた畫一的なものとなり、個性の輝きはとかく薄れがちである。また集團による作文は、遊びの要素を强く持つようになってくる。[1] 例えば古人の詩を一句ずつ分けとり、また坐上の器物を一つずつ選びとって、それを題として詩を作る「賦得――」の詩や、幾人かが交代で一句あるいは四句ずつ詠んで一まとまりの詩とする「聯句」が盛行した。

このように文學が集團とは切っても切れない關係にあった梁代については、その文學を研究するための準備段階として、文學集團の調査と整理とが先ず爲されなければならない。その集團にどのような人物が加わっており、その集團主とこれらの人々が相互に影響しあった結果生まれた、或は集團主の好みに合わせた結果それなりに生じた集團の風、特徵について、また集團相互の關係について等々、それぞれに檢討を加え、梁の文學集團の狀況を明らかにしたうえで、個々の作家および作品を、さらには時代の文學について考えてゆかねばならないものと思う。

このような見通しのうえに梁の文學集團の調査整理を始め、既に梁初の集團については「中國文學報」第二十一册に「梁初の文學集團」

として發表した。よって本論では次の問題として「太子綱の集團」をとりあげ、その成立から崩壞までを眺めてみることにする。

梁代五十年を、中大通三年(531)の昭明太子の薨去、それにつづく蕭綱の立太子を境として、前期三十年、後期二十年に分けてみると、前期は前代齊の文學の延長、後期は宮體の盛行と、大まかに特色づけることができるが、そのような前期における主な集團としては、中央には高祖、昭明太子の、地方には高祖の第三子晉安王綱、同じく第七子湘東王繹、また高祖の弟である安成王秀、南平王偉のものがあった。この中、晉安王綱、湘東王繹の集團は、綱、繹が若年であったこともあって、他の集團に比べて未完成であり、文壇に大きな影響を與えることはなかった。しかし後期になると、この晉安王集團(東宮集團)と湘東王集團がそれぞれ中央文壇、地方文壇の中心勢力となり、後期文學を特色あるものにしている。中でも晉安王綱は、兄昭明太子の後をうけて太子になると、それまで南兗州―荆州―江州―南徐州―雍州と移動した藩府において、配下の文士たちと練りあげた新體の詩を京師にもたらす。それは舊體の詩とは全く趣を異にするもので、東宮の内を、さらに都の人々を魅了し、またたく間に一世を風靡して、後期文壇の主流となってしまった。人々はその新體の詩を「宮體」とよんだ。宋齊以來の舊體にかわる梁獨自の文體を提唱した太子綱の集團は、そのようなわけで、同時に存在した高祖集團および湘東王集團をはじめとする諸王集團の中にあって、最も價値ある存在であったといえよう。

一、東宮集團を構成した人々

蕭綱は中大通三年(531)五月、兄昭明太子の後をうけて二十九歳で太子となってから、太清三年(549)五月に、侯景に制壓された京城内で帝位に卽くまでの十八年間、その位に在った。

綱が太子となった時、その下には主だったものとして次のような人々がいた。

家令兼掌管記	徐　摛	(五十八歳)
東宮通事舍人	庾肩吾	(四十五歳)
太子洗馬	劉孝儀	(四十八歳)
太子洗馬	劉孝威	(四十五歳)
太子中庶子	劉　遵	(四十四歳)
太子中庶子	王　規	(四十歳)
抄撰學士	徐　陵	(二十六歳)
抄撰學士	庾　信	(十九歳)

この中、庾信のほかは、いずれも藩府以來の顔ぶれで、以後ひき續いて此の集團の中核となっている。ただ藩府における高齋學士の中、江伯搖、孔敬通、申子悅、徐防、王囿、孔鑠らの動靜がはっきりしないのであるが、或はひき續き集團の一員として活躍していたのかもしれない。

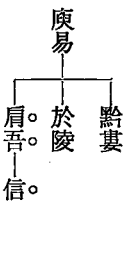
その後この集團には、蕭愷、江摠、王褒、張正見、姚察といった後進の人々が加わることになる。以下、

(1) 徐摛　庾肩吾　徐陵　庾信
(2) 劉遵　劉孝儀　劉孝威
(3) 陸罩　王規　紀少瑜
(4) 蕭愷　王褒　江摠
(5) 宗室の人々

という順序で、東宮集團を中心とする彼等の動靜を見てゆくことにす

る。

(1) 徐摛　庾肩吾　徐陵　庾信



今さら説明するまでもなく、徐摛、庾肩吾は、綱が晉安王であった頃からの此の集團の二本の柱であり、徐陵、庾信はその子である。

徐摛は太子に隨って入京するや、その新變の體が京師の評判となり、高祖の喚問をうけた。梁書本傳には、その時の様子を次のように記している。

摛の文體は既に別にして、春坊ことごとく之を學ぬ。宮體の號、これより起る。高祖は之を聞きて怒り、摛を召して加讓せんとす。見るに及び、應對は明敏にして、辭義觀るべし。高祖は釋さんと意い、因って五經の大義を問い、次いで歷代の史および百家の雜說を問い、末に釋敎を論ず。摛は商較　縱横、應答は響くがごとし。高祖　甚だ歎異を加う。

このことがあってから、摛はあらためて高祖の親狎を被ることになり、宮中への出入りを許され、寵遇は日ましに厚くなっていった。ところが領軍の朱异は、それまで保ってきた高祖側近としての地位を摛に奪われるのではないかと懼れ、高祖に「摛は年老い、また泉石を愛し、一郡に在りて以って自ら怡養せんことを意う。」と、あとなきことを言上し、それを眞にうけた高祖は、摛に「新安は大いに山水好し。任昉ら並びに嘗て之を爲む。卿よ、我が爲に此の郡を臥治せよ。」と言って、その年（中大通三年）さっそく新安郡の太守に任じてしまった。しかし任期が滿ちてからは、また太子の側に還って中庶子となり、大同の末に左衞率に除せられて太清三年に至っている。

一方、庾肩吾は、入京して五年目の大同元年（535）に、荆州刺史であった湘東王繹のもとに錄事參軍として赴任し、大同五年に王が石頭戍軍事として京都に還るまでに、中錄事、諮議參軍と累遷し、その後はまた太子率更令、中庶子として太子に仕えている。

このような二人をそれぞれ父にもつ徐陵と庾信は、周書庾信傳に

時に肩吾は梁の太子中庶子掌管記たり。東海の徐摛は左衞率たり。摛の子陵および信は、並びに抄撰學士たり。父子　東宮に在り、禁闥に出入し、恩禮與に比隆するもの莫し。

とあるように、二人とも父親の摛、肩吾とともに東宮に在り、また高祖に愛されて宮中にも出入している。庾肩吾が太子中庶子、徐摛が左衞率といえば、それは大同の末頃のことであったろう。

ところで、ここに到るまでの陵、信二人の經歷についてみると、陵は普通二年（521）、十六歲の時に平西將軍寧蠻校尉の晉安王に召され、參寧蠻府軍事となっているが、信の方は湘東國常侍で起家し、ついで安南府參軍に轉じて、晉安王時代の綱には仕えておらず、中大通三年、綱が太子となって文德省を東宮に開いた時に、陵および張長公、傅弘、鮑至らとともに學士となったのが、綱に仕えた最初である。とはいえそれまでに、父肩吾に伴われて晉安王時代の綱と接觸のあったことは言うまでもなかろう。

その後、太清三年に至るまでの二人の經歷についてみると、徐陵は大同の末に東宮學士から尙書度支郎となり、ついで上虞の令として赴任する。ところが、かねてから仲の良くなかった、かつての東宮集團における同僚　御史中丞劉孝儀に彈劾されて免職となった。その後、

南平王（恪）府の行參軍、通直散騎侍郎となったが、そのころ太子の撰になる「長春殿義記」の序を命によって作っている。また彼は太子の命によって、綱とその集團の人々の成果ともいうべき「玉臺新詠」を編んでいるが、それもこの頃のことであろうか。ついで太清元年（547）に湘東王中記室參軍に遷り、翌年、兼通直散騎常侍として魏に使している。陳書本傳によれば、その際に次のようなことがあったと記す。

魏人　館を授けて賓を宴す。是の日、甚だ熱し。その主客魏收、陵を嘲けりて曰く「今の熱き、當に徐常侍の來るに由るなるべし」。陵　卽ち答えて曰く「昔　王肅の此に至るや、魏の爲に始めて禮儀を制す。今、我　來聘し、卿をして復た寒暑を知らしむ」。收は大いに慙ず。

陵はこのように、學士から尙書度支郎に遷った大同の末以後は、直接東宮に仕えることはなかったが、父の摛が引つづき東宮職でもあったし、東宮集團との緣は切れなかったものと考えられる。

一方、庾信は、陵と同樣に大同の末に東宮學士から尙書度支郎に遷り、ついで通直正員郎となっている。その後、兼通直散騎常侍として魏に使したが、その際に信の文章辭令は鄴下の評判となっている。[2] 魏から還ると復び東宮學士となり建康の令を領しているから、信が魏に使したのは太淸二年の陵の場合よりも前であったようである。倪璠の庾子山年譜によれば、それは大同十一年（545）のことになっている。

ところで、東宮集團における文學・文章の方向づけは、太子綱の文學觀、文章觀によったことは勿論であるが、それと同じくらい或はそれ以上に徐庾父子の力を高く評價すべきであろう。中でも最も大きな影響を與えたのは徐摛である。彼は綱がまだ七歲の少年であった頃、

高祖の「我の爲に、一人の、文學ともに長じ、兼ねて行いある者を求めよ。晉安と遊處せしめんと欲す」。（梁書徐摛傳）という要請をうけた周捨に推薦されて以來、南兗州―荊州―江州―南徐州―雍州と移動する王府に隨い、その間「好んで新變を爲し、舊體に拘わらず」（梁書徐摛傳）といわれる個性的な文章を、文章のあるべき姿として綱および王府の人々に强く認識させたものと思われる。その子の陵も、父のそのような教育によってであろう「其の文、頗る舊體を變じ、緝裁巧密にして、多く新意あり」。（陳書徐陵傳）といわれる文章を書くようになっている。

このような徐摛に對して、庾肩吾の文章は、それがどのような傾向にあったものかあまりはっきりしないが、先にあげた周書庾信傳の記事に續けて、

既に盛才あり、文は並びに綺艷、故に世に號して徐庾體と爲す。當時の後進は、競いて相い模範し、一文ある每に京都に傳誦せざる莫し。

のように、徐庾父子の文體を「徐庾體」とよび、それを「綺艷」と稱しているから、肩吾の文體も、徐摛の「舊體に拘わらぬ新變」の體と似たようなものであったと言えよう。

ところで「綺艷」と稱される「徐庾體」は、また「輕艷」とも「艷麗」とも評される「宮體」は、いったいどのような文體であったのか。それは徐摛の文體についての梁書の、

好んで新變を爲し、舊體に拘わらず。

摛の文體は既に別にして、春坊ことごとく之を學ぬ。宮體の號、これより起る。高祖は之を聞きて怒り、……

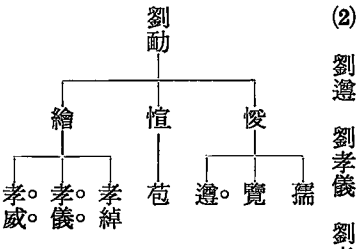
また徐陵についての陳書の、

其の文、頗る舊體を變じ、緝裁　巧密にして、多く新意あり。

という記述によって、大體のことは想像されるが、要するにそれは、形式の面では、典故を敷きつめて舗陳の巧みさを誇るようなことをせず、輕快な表現、滑らかな言いまわしによって、作者の情性を直接的に表現する、また內容の面では、多く、女性の空閨の情や姿態、女性の服裝、女性の用いる器具など、素材を女性の世界に求めたものであった。[3]「綺豔」「豔麗」「輕豔」という評語は、このような文體について言ったものと思われる。なおこのような文體が綱の集團の文體として固まってきたのは、後にも觸れるが、晉安王時代後期のことと推測される。

以上、徐庾父子の文體について、その特徵と集團との關係を述べたが、要するに、用事の巧みさと言辭の麗しさとを評價の基準とする齊以來の舊體に代って、「綺豔」「豔麗」と稱される梁獨自の文體を確立した功績の大半は、徐庾父子、特に徐摛に歸せられるべきものと思われる。

(2)　劉遵　劉孝儀　劉孝威



劉遵、劉孝儀、劉孝威の三人は、このように從兄弟、兄弟の間柄である。

さて劉氏は、

（孝綽の）兄弟および羣從　諸子姪、當時七十人あり、並びに能く文を屬る。今古いまだこれ有らざるなり。（南史劉孝綽傳）

といわれるように、蕭、謝、王、到、陸の諸氏とならんで、多數の文人を輩出した氏族である。このような劉氏の中で、孺、苞、孝綽は梁初天監における「後進文學の士」であり、苞は早く亡くなったが、孺、孝綽は高祖集團の一員として後期文壇でなお活躍している。

ところで遵、孝儀、孝威も、孺、苞、孝綽と同樣にそれぞれ劉氏を代表する文士であるが、彼らは高祖集團には屬さず、徐摛、庾肩吾とともに、綱がまだ晉安王であった頃から、その集團の一員となっている。梁書庾肩吾傳には當時の樣子を次のように記している。

初め太宗、藩に在るや、雅より文章の士を好む。時に肩吾は東海の徐摛、吳郡の陸杲、彭城の劉遵、劉孝儀、儀の弟の孝威とともに賞接さる。

まず劉遵は、著作郎太子舍人で起家し、天監の末から普通の初めにかけて晉安王の宣惠、雲麾二府の記室となり、一時、南徐州治中に轉じたが、普通五年（525）には雍州の刺史であった晉安王に召されて安北諮議參軍となり、綱が太子になると中庶子に除せられた。梁書本傳には、

遵は藩に隨いてより、東宮に在るに及ぶまで、舊恩を以て、偏えに寵遇を蒙り、同時のひと、及ぶもの莫し。

と、その寵愛ぶりが述べられているが、中庶子となって四年目の大同元年（535）に四十八歲で亡くなった。太子は遵の從兄の陽羨令劉孝儀

に次のような令を與えて其の死を悼んでいる。

吾　昔在　漢南にありし時、（遵は）書記として連翩たり。朱方を忝うするに及び、坐首に從容たり。良き辰　美しき景、清風の月夜、鷁舟　乍ち動き、朱鷺　徐に鳴くときは、未だ嘗て一日として追隨せず、一時として會遇せざりしことあらず。酒闌にして耳熱くなれば、志を言い詩を賦し、忠賢を校覈し、文史を榷揚す。「益者三友」とは、これ實に其の人なり。……（梁書劉遵傳）

晉安王時代から常に綱の側に侍り、文章を作り談論をかわし、このうえなく賞愛された人であった。

劉孝儀は、梁一代を通じての代表的文人、劉孝綽の弟である。遵に少しおくれ、普通五年（525）に雍州刺史の晉安王に召されて安北功曹史となり、ついで主簿に轉じた。中大通の初に母の死によって、兄弟ともども職を去り、王が太子になると復びその下で洗馬に補せられ、ついで中舍人となる。しばらくして陽羨の令として赴任し、また建康の令となり、以後、中央と地方とを二三度往復して、太子に直接仕えることはなかったが、しかし、東宮集團との關係は絶えなかったようである。彼の文才については、兄孝綽の「三筆六詩」(4)（三は三男の孝儀、六は六男の孝威のこと）という言葉によれば、弟の孝威が詩に秀でていたのに對して、文章に長じていたらしい。南史本傳には、彼が勅命によって製した「雍州平等寺金像碑」を「文　甚だ宏麗なり」と稱している。

劉孝威は、太子となった綱に太子洗馬として仕えるまでは、普通五年（524）に安北晉安王の法曹となり、ついで主簿に轉じて母の死に遇っている。太子洗馬からは中舍人、庶子、率更令と累遷し、それぞれ東宮の管記を掌った。太清になってからは中庶子兼通事舍人となる。兄の孝儀が、太子に仕えてしばらくして東宮を離れ、以後は中央と地方とを往復したのに對して、孝威は綱が太子であった十八年間、常にその側に侍っていたわけである。このように、綱が晉安王であった頃からその側に仕え、以來　太清に至るまで側を離れなかったことからみて、徐摛や庾肩吾と同じく、孝威も集團の中核的な存在であったことが推測される。庾肩吾とは同年輩、徐摛よりは十數歲年下であるが、同じ集團に兄の孝儀、從兄弟の孺が屬しており、また長兄の孝綽は高祖集團の俊秀、從兄弟の孺も同じく高祖集團の長老という一門の力を背景にして、家柄のあまり良くない徐、庾兩氏以上の實力を集團内では持っていたのではあるまいか。

ところで、この劉氏のように、一族の中から多數の文才ある人物を輩出した例は、この時代にはなお多く見られる。高祖、昭明太子、簡文帝、元帝、そのほか多くの文才ある諸王を擁する宗室をはじめとして、王、謝、蕭、陸、到の諸氏がそれである。參考までにそれぞれの一門の名ある文人をあげてみると、まず蕭氏には、齊の高帝の第二子である嶷の子の子恪、子範、子顯、子雲、また子範の子の滂、確、子顯の子の序、愷がおり、到氏には撝の子沆、撝の弟擔の子溉、洽、溉の孫藎、また謝氏には莊の孫の覽、舉、靈運の孫の超宗、その子幾卿、そのほか朓、徵が、王氏には儉の孫の規、承、訓、規の子褒、そのほか融、籍、泰、筠、陸氏には厥、完、襄の兄弟、完の子の雲公、また僚、任、倕の兄弟があった。

當時、氏族に對する評價は、爵位によることは言うまでもないが、それと同時に、一族中の有名文人の多少によっても爲されたようである。わが一族には、これだけのすばらしい文人がいる、或はいない、ということが、當時の人々には重大な意味を持っていた。一例をあげ

れば、天監の初、沈約に「晩來の名家は、ただ王筠の獨歩するを見るのみ」。（梁書王筠傳）と絶賛された王筠は、「諸兒に與うる書」において次のように述べている。

史傳に稱す「安平の崔氏および汝南の應氏は、並びに世を累ねて文才あり」。范蔚宗の「崔氏雕龍」と云う所以なり。然れども、父子兩三世に過ぎざるのみ。七葉の中、名德 光を重ね、爵位 あい繼ぎ、人々に集あること、吾が門の如き者あるに非ざるなり。沈少傅約、人に語りて云う「吾少くして百家の言を好み、身づから四代の史を爲るに、開闢より已來、いまだ爵位 蟬聯として、文才あい繼ぐこと、王氏の如く盛んなる者あらざるなり」。（梁書王筠傳）

一門の「人々に集あり」「文才あい繼ぐ」ことを、蟬聯たる爵位と同じ様に強調している。このように文才は、爵位とともに家門を保つためには是非とも必要なもので當時はあったのである。したがって文才ある人物の輩出は、勢力の擴張をはかる夫々の氏族にとって切實な願いであった。

ところで、一門の勢力の擴張をはかるところ、そこにはおのづから他の一門との衝突がおこる。おこらないのが不思議なくらいで、事實、數多くの爭いがあったようである。しかし今明らかにしうるのは、劉孝綽と到洽、劉孝儀と徐陵との間におきた事件だけである。劉孝綽と到洽との爭いというのは、まだ昭明太子在世中のことであるが、孝綽が自分の才能を負んで、いつも宴坐で洽の文を嗤いものにしていたのを洽がねに持ち、後に御史中丞となるや、孝綽が「妾を攜えて官府に入り、母を私宅に停めた」ことをとりあげて彈劾し、職を免じたものである。時に孝綽の諸弟は皆地方に在って、兄のために力を結集することはできなかったけれども、その文才を愛する高祖のはからいによって、孝綽は間もなく復職している。劉孝儀と徐陵の件は既に徐陵のところで述べたのでここでは重ねて述べない。この二つの事件の當事者は、それぞれ同じ文學集團、すなわち劉孝綽と到洽は昭明太子集團、劉孝儀と徐陵は太子綱の集團に屬しており、これらは結局、その集團内の勢力爭いが表面化したものとみてよかろう。個人的なものではあるけれども、それは同時に氏族間の勢力爭いでもあった。

(3) 陸罩　王規　紀少瑜

陸罩は雍州時代の高齋學士の一人陸杲の子であり、綱の晉安王時代には記室參軍として綱の文集の序を作ったりしている。綱が太子になると、その下で太子中庶子掌管記となった。これよりさき罩は、綱が雍州にあって着手した「法寶聯璧」（二百二十卷）の編纂に參加し、他の人々とともに抄撮區分の仕事に數年間從事している。[5] この書は同じく綱の撰になる「長春殿義記」（一百卷）と同様に類書であるが、その内容は湘東王繹の序に「百法の明門、玆に總べ備わる」とあるように佛教關係のものに限られていたようである。この書の編纂に參加した人々は、蕭子顯以下三十餘名であるが、湘東王の序によれば、これらの人名の下に此の書の完成した中大通六年（534）における各人の年齡が記されている。中には梁書の記述と一致しないものもあるが、參考までにあげてみると、

蕭子顯	年四十八	劉　溉	年五十八	王　修	年四十二
王　規	年四十三	劉　孺	年五十五	褚　球	年六十三
謝　僑	年四十五	劉　遵	年四十七	王　遲	年四十五
徐　喈	年四十二	褚　澐	年六十	袁君正	年四十六
陸　襄	年五十四	王　籍	年五十五	徐　摛	年六十四

劉顯　年五十三　蕭幾　年四十四　韋稜　年五十五
張緝　年四十三　蕭子範　年四十九　陸罩　年十八
蕭瑱　年四十　王許　年二十五　王訓　年二十五
劉孝儀　年四十九　謝禧　年二十六　劉蘊　年三十三
張孝總　年四十二　蕭子開　年四十四　庾肩吾　年四十八
庾仲容　年五十七　蕭滂　年三十二　蕭清　年二十七
謝嶠　年二十五　殷勰　年三十　劉孝威　年三十九
蕭愷　年二十九

（廣弘明集卷二十三）

の如くである。「法寶聯璧」は東宮集團を中心に、中央文壇の人々を總動員しての大仕事であったが、その中で十八才の陸罩は最年少である。

いったい綱の集團には梁代生まれの若手文人が多く、徐陵、庾信、蕭愷、江摠、王褒など、次の時代の文學界を背負って立つ人物が集っている。綱の新鮮な文學觀、文章觀が、常に新しいものを求める若者たちを魅了したものであろうか。これと對蹠的なのが湘東王集團で、

能く豔にして華ならず、質にして野ならず、博にして繁ならず、省にして率ならず、文にして質あり、約にして能く潤ならしめば、事は意の隨に轉じ、理は言を逐いて深く、いわゆる菁華もって問る無きものなり。

と「內典碑銘集林序」に述べる如く、文質兼ね備わった文章を理想とし、このような文章を「一家の言」を成すための手段としてしか考えない、要するに一時代前の文學觀を持つ湘東王の下には、文章と學術との均衡のとれた人物が多く集り、一篇の詩文に情熱を傾けつくす若手の文人は、あまり集らなかったようである。

王規と綱との關係は、普通元年（520）、綱が南徐州刺史として赴任する際に、僚屬として特に王規を選び雲麾諮議參軍としたことに始まる。その後、規は勅命によって殷鈞、王錫、張緬らと昭明太子の側に侍し、また當時、京兆の尹であった湘東王の宴坐において華やかに活躍しているが、中大通二年（530）に復び綱の長史となり、翌年、綱が太子となると散騎常侍太子中庶子となった。その後、吳郡太守となり、ついで散騎常侍太子中庶子に任命されたが、病氣を理由に受けず、鍾山の宗熙寺に室を築いて、そこで餘生を送り、大同二年（536）に亡くなっている。時に四十五歲であった。

彼の文章の傾向を見るに、天監十二年（512）、大極殿の改築にあたって獻じた「新殿の賦」について、梁書本傳には「其の辭は甚だ工み、祕書丞に拜せらる」とあり、また普通六年（525）、高祖が廣州刺史元景隆の餞別のために文德殿で催した宴で、勅命に應じて作った詩については、同じく梁書本傳に「規は筆を援りて立に奏す。其の文は又た美なり。高祖これを嘉し、卽日、詔して侍中と爲す」と記す。よくはわからないが、規の文體は高祖、昭明太子好みのもので、「豔」の要素はあまり多くなかったもようである。なお後にふれる王褒は規の子である。

紀少瑜は、初め晉安王國中尉となって深く王の恩寵を被り、その後、王府を離れて宣城王侍讀、當陽公功曹參軍などを經、大同七年（541）に東宮學士となった。彼の文才は早くから名士たちに認められ、王僧孺は「此の子、才藻　新拔、方に高名あらん。」（梁書紀少瑜傳）と稱し、南史本傳にはまた次のような話も記されている。

少瑜　嘗て陸倕を夢む。一束の青鏤の管筆を以て之に授けて云く「我は此の筆、猶お用うべきと以う。卿みづから其の善きものを擇べ」。其の文これに因りて遒進せり。

南史の此の話は、或は少瑜の文章が陸倕の流れをくむものであることを言おうとするものかも知れない。陸倕は、齊にあっては竟陵王子良の西邸に遊び、梁初には後進文學の士として高祖集團に屬した人物で、その作風はしたがって前代の遺風を承けつぐものである。若し少瑜の文體が陸倕のこのような流れをくむものであるなら、それは「豔」の要素のあまり多くないものであったと言えよう。

(4) 蕭愷　王褒　江摠

以上は綱がまだ晉安王であった頃から關係のあった人々であるが、ここでは綱が太子になってから新に此の集團に加わった人について述べる。

蕭愷は、高祖にその才能を愛された蕭子顯の子である。子顯は高祖集團の一員であるが、太子にも殊に愛接され、その宴坐にしばしば召されている。梁書本傳には東宮の宴席における或る日の子顯を次のように描いている。

子顯　嘗て起ちて衣を更う。簡文は坐客に謂いて曰く「常に聞けり、異人は間〻出ず、と。今日　始めて見知す、是れ蕭尚書」。

愷はこのような父に勝るとも劣らぬ人物であった。すなわち、祕書郎で起家し、太子中舍人、太子洗馬と累遷し、大同四年(538)に父子顯の死によって職を去り、服が闋(おわ)ると復び太子洗馬に除せられ、中舍人に遷り、いずれも管記を掌っている。ついで宣城王文學、中書郎を經て、また太子家令掌管記となった。

太子はこの愷が殊のほか氣に入り、早くから手許においていたが、「湘東王に與うる令」には、

王筠は本自り舊手、後進に蕭愷あり。信(まこと)に才子と稱すべし。

と絶贊している。沈約が「晩來の名家は、ただ王筠の獨歩するを見るのみ」と言っていた天監の世は、既に遠くなってしまっていたのである。愷はまた博學であり、とりわけ文字のことに詳しかったので、太子の命によって太學博士顧野王撰の「玉篇」の刪改を學士たちとともに行っている。その後、愷は吏部郎となり太清二年(548)には御史中丞となった。

なお兄の序も、太子家令、中庶子として管記を掌っているが、弟の愷ほどの才は無かったようである。

王褒はすでに述べた王規の子である。祕書郎で起家し、太子舍人に轉じ、父の死後は太子洗馬兼東宮管記として太子に仕えている。その後、顧野王とともに選ばれて太子の長子宣城王大器の僚佐となった。また高祖はその才藝を愛し、弟の鄱陽王恢の娘と娶わせている。

江摠は、後に陳の後主に愛された所謂「狎客」の中心人物であるが、十八歲の時に武陵王府の法曹參軍として起家し、丹陽尹何敬容府の主簿となり、ついで尚書殿中郎に遷った。その頃「正言」を撰し畢った高祖が「述懷の詩」を製したことがあったが、摠は人々とともにそれに同(おわ)せる詩を作って高祖に認められ、卽坐に侍郎に轉じている。尚書僕射の張纘、度支尚書の王筠、都官尚書の劉之遴といった高才碩學の人々と「忘年の友會」を行ったのは、この頃のことである。摠が東宮集團と關わりを持つのはその後で、太子洗馬、太子中舍人と遷り、太清二年には徐陵とともに魏に使することになっていたが、病のために行けず、辛うじて北地の人となることを免がれている。

以上の後進の中、太清三年に亡くなった蕭愷は別として、江摠、王褒、それに十二、三歲の頃から太子の講筵につらなっていた張正見、姚察らは、次の時代において活躍する。すなわち江摠、張正見、姚察

らは徐陵とともに陳において、北方に連れ去られた王褒は庾信と周において、夫々活躍するわけであるが、その素地は、青少年時代を過した東宮集團において培われたものである。太子綱とその集團の人々の主張は、こうして確實に次の世代に承けつがれていった。

(5)　宗室の人々

東宮集團の中には、以上述べてきた人たちのほかに、宗室の人々がいた。すなわち南史の、始興王憺の第二子上黄侯曄の傳には次のような記事がみえる。

……名は海內に盛んにして、宗室に推重さる。特に簡文に友愛され、新渝、建安、南浦と、並びに密宴に預り、「東宮の四友」と號す。簡文は日に五六たびも、使いを來往せしむることあり。

これによると東宮集團の中には、さらに宗室の人たちの小グループがあって、「密宴」に耽っていたことがわかる。この「東宮四友」の他の三人というのは、太祖の第六子臨川王宏の第五子建安侯正立、同じく太祖の第七子安成王秀の第二子南浦侯推、また第十一子始興王憺の第二子新渝侯暎と考えられるが、いずれも太子とは從兄弟の間柄である。

ところで太子をとりまくこれらの人々は、「密宴」において、いったいどのようなことを行っていたものか。詳しいことはわからないが、この內輪の宴においては、徐摛、庾肩吾をはじめとする面々の參加する集團の宴とは、また異った雰圍氣の中で、遊びが行われ詩が詠まれたことであろうと思われる。

二、集團の崩壞

東宮集團は以上のような人々を中核として構成され、梁の後期文壇の主流をなしたのであるが。十八年間でその華やかな舞臺に幕を下すことになる。すなわち太清三年(549)三月、反將侯景の攻擊によって宮城は陷落し、中央集團の人々は或は戰死し病死し、或は江陵の湘東王の許に奔れて、梁の中央文壇は一時に壞滅してしまった。この時にあたって、先に述べた東宮集團の人々はどのように身を處したであろうか。

徐摛は侯景が宮城を攻め陷した時、永福省にあった太子の側に侍立して片時もそこを離れなかった。賊が殿中に奔入してくると待衞たちは逃げ散ってしまい、誰一人として踏み止まる者はいなかったが、摛だけは太子を庇って立っていた。梁書徐摛傳にはその時の様子を次のように述べている。

摛は獨り巋然として侍立し動かず。徐に景に謂いて曰く「侯公は當に禮を以て見ゆべし。何ぞ此の如くするを得ん」。凶威　遂に折れ、侯景は乃ち拜す。

太清三年の五月、高祖が八十六歲で崩じ、太子綱は名のみの帝位に卽いた。徐摛は左衞將軍に進められたが固辭して拜せず、大寶二年(551)、簡文帝が永福省に幽閉されて朝謁できなくなると、憤りのあまり病氣になって死んでしまった。時に七十八歲であった。

庾肩吾の、宮城が陷落した時の動きについては、梁書および南史の本傳には何も記されていないが、太子の側には恐らく居なかったものと思われる。綱が卽位すると度支尙書となり、侯景に驕されて僞の詔書をたずさえて江州に行き、帝の第二子當陽公大心に降伏を諭し、大心が賊に降ると自分はすぐさま東に奔れた。その後、會稽を陷した賊將宋子仙に捕えられたが、「吾は汝の能く詩を作るを聞く。今卽ち作るべし。若し能くせば、將に汝の命を貸さんとす」。という子仙の言

葉に、筆をとって立ちどころに一首を作り、辛うじて一命をとりとめている。肩吾はその後、隙をみて間道づたいに湘東王のいる江陵に奔れ、そこで子の信と對面している。湘東王の下では江州刺史となり武康縣侯に封ぜられて卒した。さきにあげた湘東王繹の「法寶聯璧の序」によれば、入京當時の年齢が四十五歳であるから、六十七・八歳くらいであったろうか。

徐摛と庾肩吾は、東宮集團を代表する文人と見なされているが、侯景の亂に際しての二人のこのような行動を比較してみて、或は年齢の差によるものかも知れないが、徐摛こそ此の集團の中心人物であったように思われる。

徐陵は太清三年には東魏に居た。というのは、前年に東魏に使し、たまたま侯景の亂が勃發したので歸るに歸れず、そのまま東魏に留まっていたのである。侯景の入寇を聞いた陵は圍城の中にある父摛の安否を氣遣って、蔬食布衣の、全く喪に服しているような日々を送っている。梁の大寶元年(550)に、北齊は東魏の禪(ゆず)りをうけ、南方では湘東王が江陵で帝位に即いて、北齊と梁との國交が開かれると、陵はしきりに歸國を願い出たが許されなかった。しかし承聖三年(554)に江陵が西魏の手に陷ち、元帝が悲慘な最期をとげると、北齊は梁の一族、貞陽侯蕭淵明を送りこんで梁の後嗣にしようとし、その付け人として陵を從わせた。そこにおこった元帝の子方智を擁立しようとする陳霸先と、北齊の壓迫に堪えかねて蕭淵明を立てようとする王僧辨との爭いには、陵は當然、僧辨の側についたが、僧辨は敗れて殺されてしまった。しかし陵には何の咎めもなく、陳霸先の下で尚書左丞となり、さらに給事黄門侍郎兼掌詔誥となり、陳が禪(ゆず)りをうけると散騎常侍を加えられて、陳の文壇の重鎭となる。

庾信はその時、東宮學士兼建康令であった。太子の命をうけ宮中の文武千餘人を率いて朱雀航に陣を布いていたが、侯景の軍が近づくと一戰も交えずに引きあげてしまった。[6] 宮城が陷ると江陵の湘東王のもとに奔れ、王が即位すると右衞將軍となり散騎侍郎を加えられた。しばらくして西魏に使したが、その間に江陵は西魏の手に陷ち元帝は殺されてしまった。信はそのまま西魏に仕え、以後は北齊—北周—隋と、北地で後半生を送ることになる。

このような徐陵と庾信の行動を比較してみて、徐摛と庾肩吾の場合と同じような感じを受ける。すなわち庾信の要領のよさとそれに對する徐陵の謹直さ、ということである。その目で見れば、庾信が江陵の陷落に先だって西魏に使したのも、或は江陵の陷落を見こしての避難であったと考えられなくもない。そのようなことから、「徐庾父子」「徐庾體」などと常に一體として扱われている徐庾兩氏も、東宮集團内における關係は、或はあまりうまくいっていなかったのではあるまいか、とも推察されるのである。

劉孝儀は太清元年(547)に明威將軍豫章内史として赴任し、二年に侯景が京師にせまると、子の勵に郡兵三千人をつけ、折から都の救援に向かっていた前の衡州刺史韋粲に隨わせた。三年に宮城が陷ると、孝儀は前の歷陽太守莊鐵のために郡を逐われ、大寶元年(550)に病歿している。六十七歳であった。

孝威は中庶子兼通事舍人として城中にあったが、圍みを脱け出して司州刺史柳仲禮に隨って西上し、安陸までたどりついて病死した。

江摠はその時、宮中の小廟を守っていたが、宮城が陷ると命からがら會稽郡にたどりつき、龍華寺に落ちついている。江陵の元帝には仕えず、嶺南に流寓の幾年かを送り、天嘉四年(563)になって陳に召さ

れ、簡文帝の流れをくむ「浮豔に傷る」と稱される詩を傳え、後主をとりまく「狎客」の中心的存在となっている。

王褒は、侯景が都に攻めこんだ時には安成郡守であったが、湘東王繹が江陵で卽位すると、迎えられて侍中となり、さらに吏部尙書　左僕射に遷った。名家の出身であり、また文才も優れていたので、帝の寵遇は非常に厚かったが、それをもって人に矜ることのない謙虛な人物であった。江陵が陷ると王克、劉毅、宗懍、殷不害ら數十人とともに長安に連行され、後に他の人々は歸國を許されたが獨り褒は許可されず、さきに梁の使者として北地に來てそのまま留められていた庾信とともに、北方に江南文學の華を咲かせることになる。

このほか、陸罩は大同七年(541)に老母に孝養をつくすために退官し、王規は大同二年(536)に卒し、また蕭愷は太淸三年(549)に城中で卒している。「東宮の四友」の中、正立は丹陽尹、暎は廣州刺史、曄は晉陵太守として夫々官に卒したことしかわからないが、推については、吳郡太守として會稽にあり、東府城で華々しい戰死をとげたことが梁書本傳に記されている。

このようにして、東宮集團に屬していた人々は或は戰死、病死し、或は江陵の湘東王のもとに奔り、ここに天監の後半から太淸の初めまで、南兗州―荆州―江州―南徐州―雍州―京師と、地方から中央へ順調な歩みを續けて、新しい「梁の文學」を生み出した簡文帝集團は崩壞してしまう。しかしその「豔麗」「輕豔」と稱される文體は、徐陵や江總によって次の陳代にもたらされる。また南方だけでなく、庾信、王褒は北方において、北朝宗室の人々の手厚い保護の下に、その文體をひろめることになる。

三、梁代文學界に占める位置

(1)　官體の成立まで

蕭綱集團の文體上の特徵については、既に「徐摛　庾肩吾」の項で觸れたが、ここでは綱の文章觀を中心として此の集團の文章を眺めてみることにする。

綱の、文章についての主張は、要するに前代から承けつがれてきた「典故を巧みに鋪陳し、綺麗な表現を使っただけの、情性の枯渴した」文章を否定し、「瑞瑞しい情性をそのままに表現した」文章を書こう、というものであった。つまり古代の詩精神の復活を提唱したわけである。(7)

しかし、やたらに「情性を吟詠」すればいいというのではなく、その情性を盛る表現について吟味することも忘れてはいない。具體的には、古今雅俗の作品に博く目を通し、その發想、表現のすぐれている點を吸收し參考にすることを說いている。すなわち、その「勸醫論」において次のように言う。

詩を爲るが若きは、則ち多く須べからく意を見るべし。或は古　或は今、或は雅　或は俗、みな須べからく目を寓せて其の去取を詳らかにすべし。然る後、麗辭　方に吐かれ、逸韻　乃めて生ず。豈に筆を秉りて訊ねずして、詩を能善くせんや。

さて、詩について、作詩について、「情性の吟詠」を中心に考える綱は、用事の巧みさと言辭の麗しさとを評價の基準とし、「富麗」「綺麗」と稱される詩文を作ることだけに血眼になっている當時の文壇にあっては、特異な存在であった。したがって、そのような中央文壇の中心的な存在である父高祖の贊同も得られず、また當時の表現偏重、

內容輕視の風潮に疑問を懷いて、內容、表現ともに基礎を古典におき、「古典の應用」による作文に勵む兄昭明太子からも、行き過ぎとしてたしなめられるような狀況に綱は置かれていた。しかしながら綱は、自分を支持してくれる徐摛や庾肩吾を中心とする配下の人たちとともに、中央文壇の影響の少い地方藩府にあって新體詩の形成に努めたのである。

やがて新體の詩は、昭明太子の薨去により綱が次の太子に立てられるという豫期せざる出來事によって、陽の當る場所に躍り出ることになった。もし昭明太子の死ということが無かったならば、綱の集團に育くまれた新體詩は、梁の後期文壇の主流となり得たかどうか疑問である。しかしそれはともかくとして、綱は太子となり、新體の詩は「宮體」の名のもとに都にひろまっていった。父高祖の叱責も徐摛の巧みな應對によって霧散し、「輕艷」と稱され、また「艷麗」とも稱される文體は、梁代後期の文學を代表するものとなったのである。

ところで何時の頃からかわからないが、最初「性情」の中に含まれていたはずの「邊塞における雄心」とか、「悽然たる鄕思」とかが、何故か影をひそめてしまい、女性に關する情性のみが表面に强く現われてくる。綱の「湘東王に與うる書」「張纘の　集を示すに答うる書」「劉孝綽に與うる書」などにうかがえる文章觀と、「玉臺新詠」に收錄されている「艷」なる作品とをつき合わせてみる時、本人が自覺していたかどうかわからないが、そこに何らかの文學意識の變化があったものと考えざるを得ない。果してどのような變化がおこり、彼自身それをどのように受けとめていたか、その點を明確にする資料を持たないので何とも言えないが、しかし、手がかりになりそうなものが無いわけではない。

それは唐の劉肅の「大唐新語」に見える次の一條である。

これより先、梁の簡文帝　太子たりし時、好んで艷歌を作り、境內これに化し、ますます俗となる。之を宮體と謂う。晚年、改作せんとし、之を追えども及ばず。乃って徐陵をして玉臺集を撰せしめ、以って其の體を大にせしむ。

この一條について鈴木虎雄博士は「玉臺新詠集」（岩波文庫）序文によれば、

此の一條と現存の本書の姿とを對照して想像し得ることは、初、或は梁代のみの流行の艷詩を集めたものがあり、後、更に之を前代にまで推し廣めて同種の詩篇を集めたものができたのではあるまいか、「其體ヲ大ニセシム」とは此の意味であろう、ということである。

のように受けとっておられる。しかし此の一條を、既に小尾郊一教授が「艷歌と艷」（廣島大學文學部紀要第二十五卷）において述べておられるように、「玉臺集の改作」ではなく「艷歌の改作」と解することはできないだろうか。つまり簡文帝が晚年の或る時期において、それまで本來の意志に反して偏った情性の吟詠をしてきた自己を反省し、「改作せんとし」た、と解釋することはできないものか。そのように解することが可能であれば、青年時代と晚年とにおける彼の文學の變化について、解明のきっかけがつかめるのではないかと思う。

それにしても、舊體に滿足することなく、獨自の文體を生み出して、マンネリ化した當時の文章に新鮮な刺戟を與えた「綱とその集團の人々」の創造力はすばらしい。もしも簡文帝が、宮體の詩が存在しなかったならば、梁の文學の何と影の薄いことか。梁の文學から簡文帝と宮體の詩とを除いてみて、はじめてその存在の大きさに氣づくの

である。

(2)　他の集團との關係

綱が太子となって入京した當時、都には、分解した昭明太子集團を吸收した高祖集團が、中央文壇の主流として存在しており、地方には弟湘東王繹の集團が他に拔きんでた存在としてあった。この二大集團に比べれば、南平王偉の第二子恭の、

性は華侈を尙び、廣く第宅を營み、重齋　步欄は、宮殿を模寫す。尤も賓友を好み、酣讌すること終辰、座客は筵に滿ちて、言談　倦まず。（梁書南平王偉傳）

という集團、また鄱陽王恢の世子範の、

範は學術なしとも雖も、籌略を以て自から命じ、奇を愛し古を翫び、文才を招集す。（梁書鄱陽王恢傳）

のような集團は、規模的にも、またそこに集まった人物の面からいっても、問題にはならない。

前期文壇においては、

當世の高才の、王の門に遊ぶ者は、東海の王僧孺、吳郡の陸倕、彭城の劉孝綽、河東の裴子野。（梁書安成王秀傳）

と稱される安成王秀の集團や、

賢に趨き士を重んじて、常に及ばざるが如し。是に由りて四方の游士、當時の知名者、畢く至らざる莫し。（梁書南平王偉傳）

といわれる南平王偉の集團のように、高祖や昭明太子の集團に對抗しうるような集團が存在していたのであるが、後期になると、何故かそのようなものは見あたらない。これは中央における東宮集團、高祖集團、また地方の湘東王集團の存在が大きすぎたために、その他の諸王の小集團は夫々大集團の傘下に入り、獨立して特色ある動きを示すことがなかったから、とも考えられよう。

梁書、南史によれば、文學を愛好した宗室の人々は多い。すなわち、

○高祖の兄懿の子藻。

善く文辭を屬り、尤も古體を好む。太宗　之を敬愛す。（南史長沙王懿傳）

○高祖の弟安成王秀の子機。

著わす所の詩賦は數千言、世祖　集めて之に序す。（梁書安成王秀傳）

○安成王秀の子推。

少くして淸敏、好く文を屬り、深く太宗の賞する所と爲る。（梁書安成王秀傳）

○高祖の弟南平王偉の孫靜。

字は安仁、美名あり。號して宗室の後進と爲す。文才あり、志を篤くして學を好む。深く太宗の愛賞する所と爲る。（梁書南平王偉傳）

○高祖の子邵陵王綸。

少くして聰穎　博學、善く文を屬り、尤も尺牘に工みなり。（梁書本傳）

○高祖の子南康王績の子通理。

博覽にして多識、文才あり。（梁書南康王績傳）

○太宗の子潯陽王大心。

幼くして聰明、善く文を屬る。（梁書本傳）

○太宗の子南郡王大連。

少くして俊爽、能く文を屬る。擧止　風流にして、雅より巧思あ

り。音樂に妙達し、兼ねて丹青を善くす。（梁書本傳）

このような人々の下には、それぞれ文才ある人物が集り、或は集められ、文學集團が形成されていたはずである。にもかかわらず、それらの集團が記錄にとどめられるようなものになり得なかったというのは、先に述べたような理由、つまり大集團の中の一分子にしか過ぎなかったからではないだろうか。

諸王の政府における文學集團は以上述べたような狀態であるが、一方、臣下の間における集團作りの動きも活潑ではない。ただ古體派グループがやや目に立つくらいで、前期における任昉を中心とした「蘭臺聚」[8]のような大がかりなものは無い。その原因の一つとしては、諸王の中の文才ある人たちが、それぞれ文學集團の主として成長し、もはやそれに對抗するだけの集團作りが、臣下にとっては不可能となり、またその必要性も無くなったから、ということが考えられよう。いわゆる名士の仲だちも、個人の文學的才能が人の目に立ちやすくなった時代にあってはそれほど必要でなく、また同好の士が集って樂しむには、文學はあまりに立身出世と結びつき過ぎていたようである。

このような情況のもとに、綱は、地方藩府で苦樂をともにしてきた人々を率いて中央に入り、中央集團として歩みを始めるわけであるが、その中央での活動は、それまでの地方に在っての自由なものとは異り、何かにつけて制約の強いものであった。その一つの現われが、集團の代表者徐摛に對する高祖の叱責であろう。當時、高祖の下には、天監の餘風を傳える到溉、劉孺、劉孝綽、王筠、また裴子野は先年亡くなったが「古體派」の劉之遴、劉顯、張纘、後進の士としては張纘を「今の蔡伯喈なり」と感歎させた陸雲公、富麗と稱される文章で公家の筆翰を一人で掌った任孝恭、古體派の裴子野や劉顯を友とした謝徵、といった人々がいた。そこに行われていた文體は、したがって綱の集團における「輕豔」「豔麗」なものとは自から異なる、前代齊以來の「富麗」「綺麗」と稱されるものであった。このような、文章觀を異にする二つの集團が隣り合わせに存在することになったのであるから、そこには當然のことながら摩擦が生じることになる。しかし徐摛が高祖に親狎され、宮體が都にひろまってしまった結果、時流に抗して東宮集團の文體を正面から否定することは、もはやできなくなってしまった。こうして高祖集團は、中央文壇の中心としての坐を實質的には東宮集團に明け渡すことになった。昭明太子在世の頃は、その作風にそれほどの差が無かったために、高祖は太子とともに中央文壇の頂點に位置しておれたが、豔體の領袖である綱とは、そうもできなかったに違いない。以後の高祖集團は、少くとも文學に關する限り、東宮集團の華やかな動きの蔭に霞んだ存在とならざるを得なくなった。

一方、地方の湘東王集團との關係はどのようであったろう。湘東王は、綱が太子として入京した中大通三年には荆州刺史として江陵に在った。その後、大同五年（539）に領石頭戍軍事となったが、翌年には江州刺史として赴任、太清元年（547）には復び荆州刺史となっている。したがって中大通三年から計えれば、荆州に八年、京師に一年、江州に六年、復び荆州において六年の歳月をおくり、承聖元年（552）にその地で帝位に卽いている。帝位に卽いてからは僅か三年、四十七歳で西魏に害されているから、その主な文學活動は江州、荆州における湘東王時代に爲されたことになる。

このような湘東王集團と東宮集團との關係については、既に「梁の元帝」（支那學研究第三十三號）において述べたが、要するに、永遠

の「鴻儒」を目標とし、「著書」を文學の目的と考える湘東王も、表面的には太子綱に調子を合わせており、その集團においても、集團の構成員であった顏之推の、

吾が家世の文章は、甚だ典正にして、流俗に從わず。梁の孝元　藩邸に在りし時、「西府新文史記」を撰するに、一篇の錄せらるる者なし。亦た世に偶わず、鄭衞の音なきを以ての故なり。（顏氏家訓・文章篇）

という記述によって知られるように、流俗の文、つまり豔體の詩が盛んに作られていたらしい。しかしながら王の本心は、あくまでも「一家の言」を成すことにあり、そのための勉學は息むことなく續けられている。南史、南平王偉の第二子恭の傳には、その樣子を次のように述べる。

（恭は）性　華侈を尙び、廣く第宅を營む。尤も賓友を好み、酣讌すること終辰、座客は筵に滿ち、言談して倦まず。時に世宗（湘東王）蕃に居り、頗る聲譽を事とし、心を著述に務めて、巵酒　未だ嘗て妄りに進めず。恭　每に從容として謂いて曰く「下官　時人を歷觀するに、多く懽興を好まざるあり。乃ち牀上に仰眠し、屋梁を看て書を著わす。千秋萬歲、誰か此れを傳うる者ぞ。神を勞し思いを苦しめ、竟に名を成さず。豈に淸風に臨み朗月に對し、山に登り水に泛び、意を肆にして酣歌するに如かんや。」

このような湘東王は、風流人の多い諸王の中にあっては異色の存在であった。したがって、その文學集團における文章も、本質的には、王の文學觀を反映して、表現よりも內容の方に重點のおかれたものであったろう。その集團には、高祖集團に屬しながらも、王と「布衣の交り」を結んだ裴子野、劉之遴、劉顯、張纘ら古體派の人々、また顏之推の父の協や臧嚴、王籍、劉杳、顧協ら、その後をうけた鮑泉、宗懍、劉緩、劉毅、周公直らがいたが、これらの人々の多くは、文と質との平均のとれた、いわゆる文質兼備の士である。

このような、文章と著述とをはっきり區別し、文章そのものにはそれほど價値を認めない湘東王とその配下の「文義の士」たちは、文章自體に大きな價値を認め、新しい文體の確立に懸命になっている綱とその集團の人々にとって、やはり何となくしっくりしない存在であったに違いない。

太子綱の集團と、それをとりまく他の集團との關係は、だいたい以上述べた如くであるが、その他の集團については、後日、稿をあらためて述べることにする。

注(1)「梁の文學の遊戲性」（中國中世文學研究第六號）
(2)周書庾信傳
(3)小尾郊一教授「豔歌と豔」（廣島大學文學部紀要第二十五卷）
(4)梁書劉孝儀傳
(5)南史陸杲傳
(6)小尾郊一教授「庾信の人と文學」（廣島大學文學部紀要第二十三卷）
(7)「簡文帝の文章觀」（中國中世文學研究第五號）
(8)梁書到溉傳に曰く「昉の還りて御史中丞となるや、後進みな之を宗とす。時に彭城の劉孝綽、劉苞、劉孺、吳郡の陸倕、張率、陳郡の殷芸、沛國の劉顯および到溉、到洽あり。車軌　日に至り、號して蘭臺の聚りと曰う」。